

「生きがいと創造の事業」に関する考察(1)

— 事例研究 —

村 山 冴 子

はじめに

老人福祉は、かつての一握りの老人を対象とした施設ケア中心の救貧的アプローチから、今日のすべての老人を対象とする在宅ケア中心のそれへと大きく方向を転換しながら発展してきている。それにつれて老人福祉の制度やサービスも、飛躍的にその数を増し、また健康の維持増進から、教育、生きがい対策までも含めた幅広いものとなってきている。

「生きがいと創造の事業」はそうした最近の動向の中で生み出された生きがい対策事業の1つである。この夏、この事業を実施あるいは実施しようとしている市町村に対して適切な助言指導を与えることをその役割の1つとしている財団法人・老人福祉開発センターが、これまでになんらかの活動をすでに行ってきたいくつかの事業について事例研究を行い、それを通して、この事業の実施状況や実施上の問題点等を把握することを計画した。その際、近畿および四国における2,3の事例研究を担当することになり、四国の市部と山村部とで非常に性格の異なる2つの事例に接する機会を得たので、ここでは、これら2つの事例を対比しながら、この事業について若干の考察をすすめたいと考える。

I 制度の概要

「生きがいと創造の事業」は、在宅老人福祉対策事業(昭和51年度発足)の一環として、昭和54年度より、市町村を実施主体に、国庫補助事業として実施されてきている。昭和54年度に全国52市町村でモデル事業がスタート、55年度にはこれに29市町村が加わり、現在の81市町村になった。今後数年か

けて300市町村までのばす意向である。

この事業は60歳以上の人々を対象に、彼等がその経験と知識を活用し、その希望や能力に応じた生産または創造的活動に参加することによって、老年期の生きがいを高め、その生活を健康で豊かなものにすることを目的とするものである。実施主体である市町村は、事業の実効を高めるため、福祉事務所、民生委員、保健所、社会福祉協議会、その他の関係機関や団体の協力を求め、地域住民と一体になって、総合的かつきめ細かな事業運営を行うよう求められている。事業参加者と事業種目の選定、設備等の整備を除いて、事業管理運営の一部を市町村老人クラブ連合会に委託することも認められている。

事業種目として一応挙げられているのは、木工、木彫、陶芸、園芸、養魚、家畜飼育、手芸、織物のほか、地域の特色を生かした独自の事業種目でこの事業の目的にかなうもの、原則として3種目以上実施することになっている。そして、(1)これら事業を行うための場所の確保および設備の整備、(2)事業参加者がその活動を行うに必要な助言・指導および講習会の開催、(3)作品展示会の開催、作品の出品等のあつ旋、は実施主体である市町村が行い、事業に参加し活動を行うに必要な原材料費は参加者が負担することになっている。自らの生きがいは自らの責任において積極的に開拓すべきものであるという考え方がその脊背にある。

この事業に対しては2年間にわたり国庫補助が行われる。初年度は設備および運営費、そして2年度目は運営費のみがその対象となる。設備費は事業活動を行うための場所の確保および設備等の整備に必要な工事費、備品購入費、使用料、賃借料等を含み、

1市町村あたり500万円。運営費は講師謝礼、消耗品費、光熱水料、設備修理費等を含むもので、54年度は実際に活動が行われたのは7月以降であったから、3/4年分として、1市町村当り1,017,900円、55年度は通年で1,357,200円となっている。これを国、都道府県、市町村がそれぞれ1/3ずつ負担するので、市町村の負担額は初年度約200万円、2年度目約45万円となり、3年度目以降は運営費を全額負担することになるわけである。

そのため当面は行政主導の色彩の濃い事業になりがちであろうが、将来は、財政面での行政負担は存続されるとしても、参加老人を主体とした民間主導的な事業へと移行、さらには独立採算制をとる自主運営事業へと発展することが期待されている。その準備としてのグループづくり、リーダーの養成、ボランティアな協力者の開拓等が今後の課題といえるであろう。

II 事例研究

1 事例1-1村-

1村は徳島県の南西部、高知県との県境近くに位置する山村である。面積的には県内市町村中第2位を誇るが、その大部分は森林で、特産の杉と、川岸段丘を利用しての柚子栽培が主たる産業である。そのほかには食品加工や縫製の工場が2,3ある程度なので、村の若年人口は中学卒業と同時に、村外、県外に流出して帰村せず、ために過疎化が進んでいる。村の中央を貫流する川沿いに8つの部落が点在するこの村の総人口は現在約2,600人(人口密度11.5人/ha)にすぎない。ダム建設のため人口が一時的に膨張した昭和45年当時の5,415人をピークに、この10年間で人口は半減した勘定になる。このうち65歳以上の人口は300人余を数え、老年人口係数は12%と、全国平均をかなり上廻っている。

こうした状況の下で、村当局は高齢者教育に力を入れて来た。それがこの「生きがいと創造の事業」を他にさきがけて手掛けた背景になっていると思われるが、事業種目として取上げられているのは、織

物、盆栽、木工・竹細工の3つで、これら3種目の選定にあたってはとくにつぎの諸点が考慮された。

- a) この土地で古くから行われてきた伝統工芸の技術を絶やさぬよう後代に伝えること。
- b) 村内ないしはその周辺地区で容易に入手できる原料・材料を用いること。
- c) 市場性をもつものを生産すること。

活動を行うための場所として、この7月半ば、村の中心近くの川土手に、広さ197㎡の作業所が完成したばかりである。近々木工用の機材が据えつけられる予定ときいた。

(1) 織物

織物として取上げられたのは太布織とよばれる土の香りのする味わい深い織物で、コウゾの樹皮を用いて生産される村の伝統的な織物である。原料のコウゾの刈り取りなどに一部男手を借りながら、野良仕事の暇をみては糸を繰り布を織るのが、昔の村の女の生活であったという。織り上った布は米袋、布団、野良着などに用いられたが、非常に強靱なので畳のへりとしても重宝がられ、下流地方から入り込んでくる仲買人に売られて、村人の貴重な現金収入源となっていた。しかし戦後は、物資がまだ乏しかった終戦直後の一時期と除きまったく見捨てられ、糸車や地機などは納屋の隅で埃をかぶっていた。

それをもう一度老人達の手で復活させ、後代に伝えようというのである。そうした働きかけが、村役場から老人クラブに対し、昨年末の忘年会の席をかりて行われた。老人クラブの反応は素早やかかった。男子1名、女子21名の計22名がこの活動に参加することになり、ほかに数名の男子が力仕事などへの協力を申し出た。参加者の平均年齢は74歳、最年長者は89歳で、3種目の事業中もっとも年齢が高くなっている。

年が明けると間もなく活動は開始された。まず原料であるコウゾの入手が先決であった。コウゾはここ30年来需要が途絶えて村からすっかり姿を消していたため、近くの山野から自生コウゾを刈り取ってこなければならなかった。刈り取ってきたコウゾ

を蒸し、熱いうちに皮をはぎ、灰汁で炊き、足で踏んで鬼皮を取り、それを一昼夜川にさらし、さらに4日間田の畔で寒気にさらして凍らせる。それをまた足で踏みほぐし、木槌で叩いて柔らかくし、2-3ミリ幅に裂いて、ようやく糸練りの準備ができあがる。こうした一連の作業が1月の寒をついて行われた。

糸練り、機織りはこの春2月から3月にかけて行われた。その指導にあたったのは最年長の女子会員で、他の2人の80代の会員とともに昔習い覚えた手順を思い出しながらの指導であった。講師料はとくに支払われておらず、講師の日当1,000円程度が活動運営費として支出されている。コウゾ蒸しから機織りまではほとんどの作業は男子会員(リーダー)の家の前庭と納屋の2階を借りて行われ、写真班も2名指名されて活躍し、初年度の活動状況はすべて記録されている。

村役場からの働きかけに応じて、こうした素早い主体的な取組みが展開されたについては、それなりの素地があったように思う。ここ数年来、村の高齢者教室では、郷土の伝説や伝統を発掘しそれを守り伝えることをテーマに、学級員の共同学習をすすめてきた。そうした学習を通して、村の伝統への関心とそれを守り伝えることへの意欲を高めてきた老人に、太布織復活への働きかけは強くアピールしたのではないかと思われる。また高齢者教室で熱心に活動してきた男子会員が自らこのグループのリーダー役を買って出、自宅の庭や納屋を作業所に提供するなど、牽引車の役割を果たしてくれたことも大きい。

このリーダーの自宅で4人の会員と対話する機会を得たが、1人を除き、他はいづれも機織りは初めてという人々であった。しかし、太布織には幼ない頃から憧れにも似た気持を抱いていたといい、今度初めて織ってみて、太さのようでない粗い糸を用いて織ることの難しさを知り、一段と意欲をかき立てられたという。その中の1人は太布織の季節以外にも織物が続けられるように、自宅に小さな地機を設けて、毛糸を素材に帯を織り始めたというように

「生きがいと創造」への自主的な歩みもすでに一部で始まっている。

太布織の過程をとにかく一通り再現してみても一応の成功を納めたことから、参加者の意気大いに揚り、今年末からの作業では、糸を染めてかすり模様を織ろうとか型染めをしてはどうか等の意見も出てきている。またコウゾは挿し木で簡単につくことから、自分の家の山畑などに挿し木をする会員が増えており、原料確保にも自主的な対応がみられる。こうして太布織は老人クラブの会員を中心にすでに一人歩きを始めているといえそうである。

太布織を今後独立採算の自主運営事業に育て上げていくためには、素朴なその持味を損なうことなく、如何にしてその商品性を高めていくかという大きな課題を解決しなくてはならないであろう。反物が織り上げられるまでに必要とされる多くの労力と技術は、反物の形でそのまま販売したり、従来の用途に固執したりしてはとてどもペイできない。最近大都市やその周辺では、失われた自然へのノスタルジーから、藤製品や民芸調の家具、家財、衣類の売れ行きがよいという。太布織についても、簡単なかすり模様を織り込んだり、型染めをしたり、色糸でかがったりして、のれん、テーブルセンター、ソファ掛け、座布団、壁布、カーテン等に仕上げていけば、若い都市生活者に喜ばれるのではないかと思われる。ただし、これらの生産品が都市生活者の感覚にマッチしたものとなるためには、そうした感覚を身につけているコーディネーターの専門的援助が必要ではないかと思われる。太布を愛し、太布のよさを真に生かしながら、そこに新しい感覚を盛り込んでいく、そうした援助のできるボランティアを獲得することは決して容易ではないと思われるが、このようにして山村と都市の生活が結ばれるとき、太布を伝える老人の「生きがいと創造の事業」は一段と豊かな意味をもつものとなるであろう。

ところで太布織の復活には、たゞ単にそれを復活させるというだけではなく、それを後代に伝えるという願いがこめられている。そのためには、この事

業への若い世代の参加が望まれるが、目下のところその希望は実現されていない。若年層は村外に流出、村の中年の主婦はその8割までがパートに出ており、夜は夜で体育活動に忙しく、太布織にはほとんど関心を示していないからである。しかし、太布織から市場性ある商品をつくることに成功すれば、これらパートの主婦達の関心をひくことも可能になるのではないかと考え、またそうした展開に若い世代からの助力を期待したいものである。

なお作業所の完成にともない、織機などもそこに移されることになるが、今春作業が行われた場所は会員達にとって足場がよかったのに対し、新設の作業所はそこから徒歩で15～20分の川向うにあり、作業が冬場、集中的に行われることもあって、高齢会員のための足の確保が問題になってくる。場合によっては、織機を2カ所に分置して、今春の作業場所でも併行的に作業をすゝめていくことも考えられている。それでもなお遠隔地の部落の老人はバスを利用して作業所に通わねばならず、バス代の負担が経済的に困難な場合も多いが、その解決策は今のところ見出されていない。

(2) 盆 栽

四国は昔から盆栽が盛んな土地柄で、香川県、愛媛県は洗練された松の盆栽の生産でその名を知られている。技術的にそれを上廻るものがない以上、同種の素材ではとても太刀打できないとあって、I村では紅葉、ぶな、けやき、あせび、すいしば、ひめしゃらなど、手近かな自然に自生していて元手のかからない植物を採集し、余り手をかけぬまま素材の持味を生かして売ることによって特色を求めている。

盆栽はすでに数年来、高齢者教室や文化協会の活動種目として取上げられて来ており、それがこの事業で盆栽を事業種目の1つとして取上げることになった背景をなしている。盆栽への参加登録者は18名(男17名、女1名)で、平均年齢は72歳と、太布織をやや下廻っている。これまでに春秋2回、村外からセミプロ級の講師を招いて、剪定、根切り、植えかえ等についての指導を受けた。

盆栽への参加者は各自自宅の庭先や休耕田を利用してその活動を行っている。リーダー格の会員の家を訪ねてみると、その前庭約50坪と、村外に移住した人の家の前庭50坪ほどに、多種多様な盆栽の素材が直植えされており、とり木という挿し木の一種も試みられていた。

長期間かけて丹精することより、素材を売ることによって重点がおかれ、近くの山野から素材がつつぎと採集されてくるとなると、それらをさっさと売りさばいていかなければ、忽ち土地はふさがってしまう。そのため村の図書館横の空地に、森林組合が作ってくれた棚に作品を並べて、展示即売の形をとっているものの、売行きはかんばしくないという。そこで最近は出張販売をも試みており、川の上流で行われる秋の行事“もみじ狩り”に出張して60鉢売り、12,3万円の収益をあげたという。今後さらに近くのキャンプ場や徳島の阿波踊りに出張販売することも考えられている。

問題はそのため輸送手段をどうするかであろう。現在のところはリーダーが販路拡張に孤軍奮闘、その子息が鉢植えの輸送を買って出ているが、今後本格的に出張販売をすることになれば、村が輸送サービスに事業運営費の一部をあてる必要もでてくるのではないだろうか。

また、いかに素材の持味で勝負するといっても、国内盆栽人口が多いだけに、作品の洗練度をこれから徐々に高めていかななくては販売成績もあがらないのではないと思われる。講習の回数を増やすとか、グループによる共同学習の機会をつくるなどして、技術向上をはかる必要もでてくるであろう。

(3) 木工と竹細工

I村では豊富に産する杉、桧などを用いて、かつて茶托、盆、灰皿などが生産されていた。杉の焼板を使った茶棚などにもみるべきものがあった。今はもうほとんど忘れられているが漆器が生産されていた時期もあった。また竹材で“いかき”と呼ばれる籠も広く作られていた。これらすたれかけている伝統工芸にもう一度息をふきかえさせ、村の特産

品として売り出そうというのである。

この8月作業開始を目標に、木工用機械の備えつけが行われようとしているところである。作業は週2日が予定されている。参加登録者は現在のところ26名(男21名、女5名)で、平均年齢は69歳と、3種目中もっとも低くなっている。それでも、本格的な木工用の機械を使いこなすだけの体力や知力を果してこのうちの何人がもっているかは未知数で、村役場としては、ごく少人数でもよい、こうした作業に耐え得る人が定着してくれば、と考えているようである。

講師としてはこれまで村で木工業を営んできた40代および50代のプロが予定されており、機械の管理者も必要となるから、この中の1人を常雇いすることも考えられている。木工の材料には10数年前密植された杉の間採を用いる予定である。これら若杉の間採は輸入木材に押されて市場性を失っているため、ほとんどタダ同然で利用できるが、問題はそれを誰が伐り出すかである。また木工用の機械操作では怪我人が出るおそれもあるところから、個人ないしは事業所単位で労災保険をかけておく必要もあるであろう。

(4) 要約と検討

以上3種目の事業について一通りみてきた。最後の木工が今後どのような方向に発達していくかはまだ未知数であるが、前2者についてとくに印象的だったのは参加者自身の主体的な取組み方であった。

農村の老人はいくつになっても生産者であり続けるのだろうか。I村の老人達にとって、ものを作ることを、生み出すことは、ごく自然な日常的営みであり、生産品を売ることは当然のこと、生産活動の前提であるようにみえた。こうした態度が顕著であるということは、I村がかつて貧しい山村であったことと考え合わせれば容易に首肯できるが、それは同時にまたこの村では今もなお明治以来の隠居制の名残りがみられることとも無関係ではないように思われる。長男の結婚と同時に、次男以下をつれて隠居家に移り、独立の生計を営むという風習が、こうした

主体的な老年期の生き方を生み出しているのではないだろうか。

今一つ考えられるのは高齢者教室の存在である。この村の高齢者教室では、これまで毎年「ふるさとを探ねて」と題するB5版の冊子を発行しており、(1)神話と宗教、(2)民話と伝説、(3)年中行事、(4)道と集落、とすでに4冊が老人自身の手でまとめられている。こうした学習活動を通して、郷土の文化と生活についての新しい認識と関心が育くまれ、そこからさらに絶えかけた地域の伝統工芸を復活させ、それを村の特産品として売り出そうというような発想が生れてきているのではないだろうか。

ただ、こうした老人の姿勢と若い世代の姿勢との間にはかなり大きなギャップが存在する。老人のつくる竹かごやぞうりは家族に一向喜ばれず、かえってプラスチックやビニール製のそれがもてはやされる。また食品にしても、手作りのものより店屋物が歓迎される風潮が最近強まっているという。そして若い主婦の約8割は近くの縫製工場や食品工場にパートに出ており、夜も夜なべよりはスポーツに人気が集まっていて、村民体育館などで、夜、卓球やバレーボールを楽しむ主婦が増えているという。こうした状況の中で「生きがいと創造の事業」を通して地域の伝統工芸を復活させ、若者との接触を通してそれを後代に伝えたいという老人の願いは簡単には叶えられそうもない。

将来、生産されたものが順調に販売されるようになれば、あるいはの期待をもつこともできる。すでに指摘したように、ただ反物を織るだけでなく、その持味を生かした商品に仕上げていくことが太布織についての懸案であり、もしそれが解決されれば、現在パートに出ている若い主婦達の関心をさそうこともできよう。木工についても同様のことがいえる。しかし盆栽については、かりに栽培技術に磨きがかかり、販路が拡張されて、収益があがるようになっても、若い世代の参加を期待するのは無理ではないかと思われる。

「生きがいと創造の事業」への参加を広げていく

上で今後ともネックになるであろうのは、作業所までの足の問題である。広い村のことで、最東端の部落から最西端のそれまでに10kmの距離がある。作業所は村の中心に位置しているが、最遠隔地からバスで片道420円かかり、老人には大きすぎる負担である。この問題への対応が、この事業の発展をはかる上での重要な鍵となるであろう。

2 事例2-A市ー

A市は瀬戸内海に面した気候温暖の地で、江戸時代に導入された製紙業が現在も市の基幹産業となっているが、さらに臨海工業都市の一環としての開発もすすめられている。現在、市の総人口は約37,000人、老年人口は約4,000人で、老年人口係数は11%強である。

これまでも公民館主催で「遊びと工作の教室」が開かれ、老人が子ども達に、竹馬・竹とんぼ・水鉄砲などの昔懐かしい遊びを教える場が設けられたり、また社会福祉協議会と老人クラブ共催で「老人と子どもの談話室」がもたれ、昔の生活や土地の歴史・地形などについて、老人が子ども達の質問に答えるなど、老人のために社会参加の機会が提供されてきたが、老人の生きがいを高めるという点では今一つの感があつた。その決め手になるものを何か、と市当局が模索しているところにたまたま「生きがいと創造の事業」に関する県からの通達が入り、渡りに舟と計画が進められて、昨年8月実施に移された。

事業運営に直接責任をもっているのは市福祉事務所の老人福祉係で、現在のところ、木工、陶芸、盆栽の3種目を取上げている。本年度の参加者数は、木工31名(男20, 女11)、陶芸43名(男11, 女32)、盆栽58名(男25, 女33)で、男女を問わず盆栽に人気が集っている。それぞれ講師を委嘱して、隔週、午後1時から5時まで、市の老人憩の家の庭に新設された鉄筋コンクリート造りの作業場(30㎡)およびプレハブ建築の作業場(39㎡)、それに必要によっては老人憩の家の一部を利用して、講習を行っている。受講期間は一応1年間と定められているが、今年度新規受講者が少なかったこともあって、昨年

度に引き続き受講している人もかなりある。また2種目、3種目と併習している人も少なくない。

(1) 木工

木工の講習日は火曜日である。開始時間の午後1時までにはほとんどの受講者が作業場に顔をみせ、講師から作業の手順や注意を聞く。それが終わるとすぐ、受講者の手で作業台が並べられ、道具類が持ち出されて、作業の準備が整う。受講者は8人ずつの4班編成で、各班ごとに作業台、道具類を共同使用するが、ノコをひいている人、カンナをかけている人、ニスを塗っている人など、作業内容も作品の種類も思い思いである。1カ月を費して製作したワゴンのニス塗りに忙しい2年生に声をかけてみると、2段と指示された棚を3段にし、その棚を固定せず横に引き出せるように工夫して、持ち運びの楽な大工道具入れにしたと誇らしげであった。食堂を経営しているある受講者は岡持を作って日々の営業活動に役立てているし、陶芸を併習している人は自分の焼いた抹茶茶碗のための木箱を、盆栽を併習している人はその盆栽のための花台を、また作り上げた花生けに得意の日本画の腕を揮って絵付けするなど、それぞれ何がしかの工夫をこらして、独創性ある作品を製作していた。

次の作品を何にするかは受講者の希望によって決定される。皆の希望がまとまったところで、講師がおよそ2週間ほどの時間をかけて、作品の形や製作方法を決め、希望者数だけ材料のセットを用意して、実費で頒布している。講師は4人、いずれも市ないしは隣接市の建具組合に属する現役のプロで、受講者の希望に応じて、材木の切れ端や廃材を利用しながら、見栄えよくしかも安い作品を作る工夫をすることが生きがいになっているという。高齢者相手のことでもあり、また、カンナなどこれまで一度も手にしたことの無い女性も含まれているので、講師としては怪我を防ぐことに細心の注意を払っている。そのための手段としては、タイミングよく休憩時間をとること、材料や道具を丁寧に扱い、使った道具を元の場所に戻す習慣をつけさせることであるとい

う。また危いから機械は入れず、道具類だけで作業するようにしている。

受講者の間で満足度は極めて高いように思われる。80歳というある男子受講者は「この年になって初めて生きがいを得た」と語っているが、その意味は「時の経つのを忘れるくらい夢中になって打ち込める何かを手に入れることができた」ということであり、そうした気持のハリが身体的な健康にもいい影響を及ぼすのか、「これまで2年も重い病気を患っていたのに、木工を始めてからは風邪一つひかず、ほとんど無欠席で通いつめている」という。また身軽になって、これまでのものぐさが直ったともいう。ある女子受講者は、「これまで大工仕事は敬遠していたのに、ここで親切に教えてもらえるので、家に帰ってから気軽に修繕などができるようになって嬉しい」と語っていた。ほとんどの人が、作品を子ども達の家にもっていき喜んでくれる。それが大きな励みになることを指摘していた。

木工が「生きがいと創造の事業」の1種目として選ばれた理由の1つは、身体を動かすことが心身の健康増進につながるのではないかと考えられたこと、もう1つはこれまで老人対象の講座に男性の参加者が少なかったので、何か男性にアピールするものをもと考えたためである。受講者の2/3が男性ということで、このねらいは一応達成されたといえそうである。

(2) 陶芸

陶芸は水曜日の午後、木工と兼用の作業所を用いて行われている。ろくろは使わず、手びねりで、抹茶茶碗、盆栽用の鉢、壺、湯呑みなどを、作業所附属のブロック造り窯小屋で焼いている。低温加熱処理の楽焼である。ガス窯なので、危険を考えて、窯入れから焼き上げまで担当の市職員が一切担当している。

陶芸を取上げた理由は、二六焼の窯元が近く、陶芸への関心が市民の間に高いことであった。講師は蛙やカニの観察描写で一家をなした人で、70歳に近い高齢者。ユニークかつ熱心な人であるが、教え

ることに不馴れなところに、43人という大教室で、しかも受講者のレベルや希望作品の種類もまちまちなため、指導に困難が多く、その点で講師の側にも受講者の側にも幾らかの不満があるようである。

それでも受講者が陶芸から得ているものは大きい。ある男性受講者は「退職以来何かしたいと思いながらもボーツとして暮らしていた。責められるようなつらい気持でいたところにこの事業が始まった。陶芸を始めてから道が明るくなり、目標ができた。ハリと希望のある毎日を送っている。作品が完成する度前進したと感ずることが出来る。ただその歩みは緩やかな昇りではなく、迷いと停滞があり、その時期の苦しさにじっと耐えていると、目の前の霧が晴れて、スッと明るくなる。とても気持のよいものです」とその経験を語ってくれた。また生活のあらゆる場面で目にし耳にするものすべてが、陶芸との関連で新しい意味を持ち始め、面白い図柄一つみてもすぐ焼物の模様にすることを考え、スケッチブックに控えておくなど、研究的な姿勢も随所に見られ、「作り出したらやめられず、夜が白らむまで土をこねている」とか「神経痛の痛みも陶芸を始めると忘れてしまう」など、陶芸を通じて生活に新しい目標やハリが出てきた様子がうかがえた。

ただ今後の運営に関しては再考の余地がある。現在のところまだカリキュラムが準備されておらず、受講者が思い思いに自分の作りたいものを作り、行き詰ったところで講師の指導を受けるというかたちをとっている。しかし、受講者が将来創造的といえるような作品を自力で作っていけるようになるためには、基礎的な知識や技術をしっかり身につけることが大事であり、そうした基礎を身につけさせることが、こうした期限付きの講座の目標ではないかと思われる。そこがあいまいになると、一部の研究熱心な人を除き、結局土こねに終わるおそれがあるのではないだろうか。

実際、受講者の中からもそうした声が聞かれた。今年2年目で直径20cmほどの見事な壺と制作するまでになった人は、釉薬の配合と火加減、焼き時間

がどのように作品の出来上りに関係しているかを知りたいと切望し、自分の住んでいる地区に新しく窯場を設け、自分達の手で焼くことに意欲をみせていた。焼物はやはり釉薬の調合から窯入れ、焼きあげまで一貫して自分の手でやってみなければ、本当の醍醐味は味えないのではないだろうか。ガス窯では不安が残るが、電気窯なら老人でも危なげなく扱えるのではないかと思う。そうした点で十分な配慮をしながら、受講者の中に芽生えた自主的な姿勢や意欲を育てるような方向で、この事業をすすめるべきではないかと考える。

(3) 盆栽

盆栽は金曜日に、老人憩いの家の大広間と庭を用いて行われている。盆栽は受講者 58 名ともっとも人気の高い種目であるが、その背景には、市の近郊に五葉松の産地があり、また皇居の松を一手に扱っている地区もあって、このあたり一帯、盆栽への関心が高く、洗練された盆栽の生産で知られる土地柄であるという事実がある。

盆栽講座はこの事業開始に先立って、市社協主催の成人学級で取上げられていたが、この事業発足と同時にこちらに引き継がれた。そのため受講歴 6 年という人もいる。講師は趣味が嵩じて本業になったという人で、手広く盆栽業を営むかたわら、教えることにも工夫を重ね、講義内容の整備もすすんでいる。盆栽の種類や呼称、管理方法などを簡単にまとめた小冊子を最初に配布して、一通りの基礎を教え、それから季節に応じた手入れの仕方を、各自が持参した現物を用いて実習するという方法がとられている。実習内容としては、樹形のととのえ方、施肥、根切り、植え替えの仕方などが主なところである。

盆栽の素材は松や梅などに限られているかのような思い込みが一般に強いので、この講座では手近なところにある草花でさえも立派に盆栽の素材となることが繰返し教えられている。受講者の間でも「夏にはこれまで見向きもしなかった野草が取上げられ、大変涼しげなので気に入った」と好評である。また

季節感のある素材が年に 2 度ほど、講師の手で準備され、実費（300～500 円程度）で頒布され、皆が一斉に同じ素材に取組む機会も与えられている。

また樹と鉢の取合わせの重要なことも教えられ、盆栽と陶芸を併習して、鉢まで自分で焼いている人もある。このように盆栽は、樹形を整えたり、樹と鉢との調和を考えたりしながら、自分の手で作り育てた世界に唯一つしかない作品を、日夜賞でいつくしむことに楽しみがあるようである。

(4) 要約と検討

事例 1 の事業が生産活動の色彩を濃くもっていたのに対し、A 市のそれは趣味活動の色彩が濃い。ここでは「老人の知識や経験を生かす」ことよりも、これまで働くばかりで楽しむことを知らなかった老人に、趣味活動のメニューを提供し、生きがいとなるような活動を何か 1 つでも見つけてもらう手助けをすることに力点がおかれているようにみえる。

そのためもあってか、ここでは若い世代との交流といったことは直接的な関心事となっていない。しかし、これまで家でテレビばかりみていた老人が、どこかへいそいそと出かけていったかと思うと、湯呑みや風呂の腰かけなど手づくりの品を携えて帰ってくる。それが家族の話題になったり、重宝がられたりすることで、結果的には若い家族員との交流が生れており、また老人の死後もこれらの作品が子ども達の家で日常用いられるだろうことが、老人にとって大きな慰めと励ましになっているのも事実のようである。事業への参加はまた新しい友人や知己を得、日常生活に新しい興味や関心を目覚させる機会ともなるという点も見逃せない。

初年度の講座が終った本年 3 月、その集大成としての作品展が開かれた。門札、本立て、色紙かけ、鏡台などの木工品、壺、茶碗、花瓶、菓子器などの陶芸作品、松、さつき、つげ、観音竹、らん等の盆栽がざっと 260 点、老人憩いの家の大広間一杯に展示され、木工作品は一部即売されて、飛ぶような売れ行きだったという。作品展は地元紙に写真入りで大きく報道され、異色の作品は作者名入りで紹介され

た。自分で焼いた鉢に黄梅を植え「らく焼に 一
枝育てて 花植える 自己満足に生きがい感ず」の一
首をしたためて出品したある女性の作品が新聞紙上
で紹介されると、古い友人や知人から祝いの電話が
相次ぎ、久々に与えられたこの社会的認知と評価に
よって、この人は自信と誇りを回復したようであ
る。

即売された木工作品の収益はすべて出品者に還元
され、その原材料費をカバーすることになっているが、
一般的には、I村の老人と対照的に、作品を売るこ
とにきわめて消極的である。都市の老人にとって、も
のを作るということは、これまで知らなかった楽し
みであり、余技である。作品を売るという発想や売
れたことを喜ぶ気持よりは、自分の手で作ったこの
世に1つしかない作品を身近かにおいて楽しみたい
、あるいは家族や友人にあげて喜んでもらいたい
という気持の方が強いようである。

このようにみえてくると、A市の老人にとってこの
事業に参加するということは、1) われを忘れて何か
に打ち込める時間をもつこと、2) それを通じて新
しい友人や知己を得ること、3) 新しい興味や関心
をもって日常生活の万般をみることができるよう
になること、4) 自分の作品を身近かにおいて楽しみ
また家族や友人を喜ばせること、5) 社会的認知や
評価の機会を与えられること、を意味し、それらが互
いに重なり合い影響しあって、老人に生きがいを与
えているのではないかと考えられる。

参加者のほとんどは今後も継続受講を希望してい
る。市当局としても「これだけ喜んでいてる人々を追
い出すわけにはいかない」と、希望に応ずる意向で
ある。現在のところ各講座とも隔週1日づつ開かれ
ているだけだから、2級編成にし、それが交互に隔
週作業するようにすれば、現在のスペースで2倍の
人員を受入れることができ、また講座で腕を磨いた
人々にボランティア講師をつとめてもらえば、講師
を新たに委嘱しないでもやっていけるのではないか
と考えられている。

たしかに、事例1の場合と異なり、老人のもつ経

験や知識を生かす場としてよりも、老人がこれまで
知らなかったことを学習する場としての性格が強
いので、今後とも講習は必要であろうし、またそれが
1年やそこらでは足りないこともわかる。しかし、
これからもずっと受講者がたまり続け、講座の増設
を余儀なくされれば、いつかは場所、経費、職員な
どの点で行き詰まるであろうことは目に見えている。
また講座に出席することが生きがいといった受身の
態度、依存的態度を助長するようなことになっても
いけないと思う。

すべての参加者に期待するのは無理かも知れない
が、こうした講座で基本的な知識や技術を身につけ
たら、あとは個人やグループの努力で、自分のつく
りたいと思うものを自分なりの工夫で作り出す、すな
わち創造することができないものだろうか。そのた
めにはどれくらいの期間、どのような指導をすれば
よいか、それを見出すのが今後に残された課題であ
るように思われる。

III 若干の考察

このようにみえてくると、同じ名称を冠した事業で
あっても、都市と農村のそれとでは全く性格・内容
を異にするものになっていることがわかる。もっと
も、これら2事例にみられる差異をすべて都市と農
村のそれに還元するのは間違いであろう。I村のよ
うに、今まさに廃れようとしている伝統工芸があり、
それについての知識や経験をもっているのは老人だ
けといった状況がなければ、たとえ農村であっても、
I村におけるような展開はみせないと思う。また伝
統工芸があっても、それが現在も生きた産業である
ような場合にも同様のことがいえると思う。京都は
農村ではないが、今もなお生きた伝統工芸の町とし
て例にとれば、そうしたところで伝統工芸を身に
つけている老人は、どんなに年をとっても働ける間は現
役の職人として仕事を続け、その知識や技術をこう
した事業で生かすことを考えてはいない。また、た
とえこうした事業を通して伝統工芸の技術を習得し
た老人ができたとしても、それを生かす場を得るこ

とはむつかしい。たとえば、西陣織は200からの複雑な工程に分れているといわれるが、その工程は完全な分業システムになっていて、素人が立入る隙はないようである。したがって、I村の例は農村を代表する例というよりは、廃れかけている伝統工芸をもつ土地の特殊性を示す例ということになるだろう。

しかし、そうしたことを考え合わせてみてもなお、事例1と2では、参加者の示す態度や事業のあり方に明らかな違いがあるように思われる。たとえば盆栽、木工といった同種目を取上げてみても、事例1ではそれが生産活動の性格を強くもつのに対し、事例2では趣味活動の色彩が濃くなっている。農村の老人が終生生産者であろうとするのに対し、都市の老人は退職によってそれまでの職業活動を離れ、その代替として、自分の中に再び情熱的な興味をよびましてくるものとして趣味活動を求めるのであろうか。また事業へのかかわり方という点でも、事例1の老人は主体的、事例2の老人は受動的といった違いが認められるが、これは、前者では、その従事する活動についてもっともよく知っているのは老人自身であるのに対し、後者では、老人はそこで何かを新しく学ぶ者の立場におかれているためであろう。

こうした差異はさらに作り出したものをどう処分するかにも差異を生ずる。事例1の老人にとっては販売が生産の前提になっているのに対し、事例2の老人にとって作品は身近かにおいて楽しみたいもの、家族や友人にあげて喜んでもらいたいもの、とにかく不特定の他人になど売る気になれないものである。

このように個々の事業はその性格やあり方を異にし、参加者のそれへのかかわり方も自ら異なるが、

「生産ないし趣味的な創造活動を通して老人の生きがいを高める」というこの事業の目標が達成されるまでのプロセスを、そこから多少抽象化して描き出すことは不可能ではないと思う。

自分がいま従事している活動の内容が何であれ、それがその人にとって単なる暇つぶしではなく、自分の中に興味と関心と呼びおこし、自分自身を發展させ開花させるものにつながっていれば、そこから日々の生活に緊張が生まれ、生活それ自体が生き生きしてくる。それが生きがいある生活とはいえるのではないと思われるが、そうした活動への参加は新しい交友関係の発達を促がし、それが生きがい感をさらに高める一因となる。また活動の産物である作品は家族との交流を促進する働きをする一方、展示会などへの出品やそこでの評価を通して、あるいは即売会などで売れることによって、その人の生きがいに大きな影響を及ぼすものと思われる。

このようにして自分の中によびまされた情熱的な興味が永続的で満足すべき変化をひきおこすならば、それが生きがい感として感じられる一方、身体的な健康度にもよい影響を及ぼし、さらには精神的・身体的健康の間の相互作用もあって、老年期の人生が興味あるものとなるのではないだろうか。

生きがいの概念そのものの検討やこうした事業への参加促進の方法など、これからつめなければならぬ問題について検討をすすめると同時に、上にのべたようなプロセスを一応頭におきながら、この事業が「生きがいを高める」という、その目標をどの程度まで達成しているかを確かめるための効果測定を次のテーマとして取上げたい。

なおこの事例調査を行うにあたって、本学部3回生の山田裕子さんに同行願い、記録、資料の蒐集に協力していただいた。ここに記して感謝したい。